

太田辰夫「兼語動詞」再検討

中国口語研究への新視点

玄 幸 子

A reconsideration of Chinese “pivotal sentence verbs (the first verbs of pivotal sentences)” as defined by Ota Tatsuo: A new perspective on the study of colloquial Chinese

GEN Yukiko

It is a characteristic of the Chinese language that both causative and passive verbs take the same form and are fundamentally indistinguishable; Ota Tatsuo classes them both as “pivotal sentence verbs” and treats them as identical, arguing that the distinction between causative and passive is based on subjective judgement and not on objective reality. There has been much research in recent years taking this perspective of Ota’s as its point of departure. Reviewing Ota’s original position in light of the findings of recent research, we can arrive at three conclusions: (1) “pivotal sentence verbs which have the meaning ‘give’”, as a result of grammaticalization and analogy, have expanded to the two grammatical functions of the causative and passive; (2) among them, the classic benefactive verbs *yu* (與) and *gei* (給) perform both causative and passive grammatical functions; (3) in most cases, the shift of a benefactive verb to a passive marker requires the mediation of a causative, but in some cases patterns such as <verb (+give)>-<benefactive>-<passive> ; < causative >-< reflexive>-< passive > may also be observed.

The transition from benefactive verb to vocabulary marker for causative/passive usages is itself a Chinese colloquial prototype, expressed in ancient times with *yu* (與) and in modern times with *gei* (給). This paper calls the concept “prototype shift”, one which might offer a very effective new perspective if introduced into research on colloquial Chinese.

キーワード：兼語動詞 (Chinese pivotal sentence verbs)、使役 (causative)、被動 (passive)、中国口語 (colloquial Chinese)、プロトタイプ遷移 (prototype shift)

1 問題提起

論者は嘗て拙論1995¹⁾で『賢愚經』に現れる「與」をとりあげ、その動詞・助動詞・介詞・連詞・副詞・兼語動詞・補動詞の用例を全面的に検討し、六朝時代の口語「與」の様相を記述した。その中で兼語動詞としての用法を大きく被動と使役に分けて取り上げた²⁾際に、被動と使役の境界線の不明瞭な例として「世間一等流 誠堪與人笑」(寒山詩)に言及した。つまり、この句の解釈を巡って、下記のごとく異なる解釈が可能だという点を指摘したのである。

與、猶使也……。寒山詩、「世間一等流、誠堪與人笑」言使人笑。

張相《詩詞曲語辭匯釋》卷四 與 (五) p.435 (1977年1955年第三版重印本)

世間一等の流 (やから)

誠に人の與 (ため) に笑わるるに堪えたり

(注) 與は爲と同じ

中国詩人選集5 『寒山』p.188 (入矢義高著、1958年発行)

このような使役と被動の混同例についてどのように理解するのが妥当であろうか。太田辰夫1958では「がんらい使役と被動との區別は客觀的な事實そのものにあるのではなく、主觀的な判斷にもとづく」と説明されるが、更に踏み込んだ分析を近年の新分野の研究の中に見いだすことができるのかどうかをここで検証してみたい。また、同様の現象、使役と被動の混同は現代語の“让”“叫”“给”にも確認されるが、このような現象自体を口語としての特徴を証するプロトタイプとして確立しうること、その根幹は変化せず、時間軸のなかで異なる語彙の上に遷移したに過ぎないという口語研究における新たな視点を提起することが本稿の目的である。

2 太田辰夫「兼語動詞」

本論に入る前にまず太田辰夫1958の兼語動詞の扱いを確認しておく必要がある。太田辰夫1958

1) 『『賢愚經』に於ける“與”の用法について—口語史研究への一試論—』、1995年3月、関西大学『中國文學會紀要』第16号101-119頁

2) 玄1995から使役・被動の例を1例ずつ示すと：

6-2-3 世尊故衣、勿與我著。世尊殘食、莫令我噉。(使役)

6-1-2 一一華上皆有化佛、與諸大眾圍繞說法。(被動)

では「16.7 兼語動詞」において「兼語動詞には使役に用いるものと被動に用いるものとの二種がある」(p.240)と述べる。以下に同書から兼語動詞に関する該当箇所を引用する。

(以下引用部の二重下線は論者による)

現代語では《教》(叫)《讓》ともに使役と被動とに两用される。句のかたちは大體同じで、時としては…(中略)…のごとく區別することもあるがこの區別は不完全であり、基本的には使役と被動とが同じ形式であるといつて差支えない。

このようなことは現代語あるいは白話に特有であつて、古代語にはない。使役が被動にも用いられるのは意味上區別しにくい場合があるため、がんらい同一のものを、使役の場合《叫》などを動詞とし被動のばあいは介詞とするような考えは中國語の本質に基づいていない。《叫》などはどちらのばあいも兼語動詞とすべきである。……使役と被動とが共通するのはこのような理由によるが、あくまで使役がもとで、被動はそこから轉じたものである。このようなものを被動というのはいは正確でなく、動作の結果を表現するものともいえよう。このような被動の成立しやすい條件が3つある。

- (1) 兼語動詞の賓語が意志をもたないものであるばあい。

見説上林無此樹，只教³⁾桃柳占年芳(白居易詩)

(きけば上林にはこの木がないので、桃や柳に春を獨占されていると)

剛被太陽收拾去，卻教明月送將來(宋，蘇軾詩，千家詩に收む)

(いましてが太陽にかたづけられたかと思うと、また明月に送りかえされた)

叫雪滑倒了(紅8)(雪ですべって転んだ)

- (2) ある結果が惹起された気持ちをあらわす。

春思翻教阿母疑(和凝詞)(春の思いをかえって母に疑われた)

教那西門慶聽了，趕着孫寡嘴只顧打(金15)(西門慶にきかれてしまい〈かれは〉孫寡嘴を追いかけてしきりとなぐった)

這一分家私要不都叫他搬了娘家去，我也不是個人(紅25)

(この家の財産がすっかりあの女の里にはこぼれていかなかったら、首をあげますよ)

- (3) 禁止を伴うもの

第一莫教漁父見(李遠詩)(けっして漁父にみられてはいけない)

莫教人見(歷代法寶記P.2125)(人にみられてはならぬ)

3) 原文は下部に傍点を付す。太字に代える。以下同様。

莫教人笑汝（寒山詩）（人に笑われてはならぬ）⁴⁾

別叫鳳丫頭混了我們去（紅47）（熙鳳にだまされないようにしましょう）

以上の3つは必ずしも截然とわかれているものではないが、いずれにしろ、このような場合に被動の《教》《叫》が多く用いられることはたしかである。

被動の《教》は唐代より、また被動の《叫》は清代から用いられた。《讓》が被動となったのも同様の理由によると思われるが、清代までに用例をみない。

（以上 p247-248 より引用）

上記の太田辰夫の分析は、次に述べるように以後の研究の出発点となる重要な研究である。ただし「兼語式」についての研究ではなく、「使役」と「被動」の双方理解が可能な中国語の特質に関連する問題として取り上げられることがほとんどである。次にここを出発点とする近年の研究成果を概観してみよう。

3 太田辰夫を出発点とする近年の研究状況

まず蔣紹愚1994⁵⁾では太田辰夫上記引用部について《教》《叫》《讓》が使役と被動とに两用さ

4) この例について太田（1958, 248頁）では「16.7.4 複雑な被動句」の(1)に例として再掲し、次のように解説している。

白話の被動句は表現が豊富で、古代語では表現することのできないものも多い。その主なるものは次のようである。

(1) 動詞のあとに賓語をとるもの。

莫教人笑汝（寒山詩）（前出）

古代語でも《汝勿爲人笑》のごとくいえば意味はだいたい同じであるが、古代語では《汝》を主語として用いるから同じ表現ではない。

5) 蔣紹愚《近代汉语研究概況》，北京大学出版社1994 原文は次の通り：

以“教”为例。“教”作为使役动词，词汇意义很薄弱，其语法意义是表示甲使得乙发出某一动作。对于这个动作来说，“乙”就是施事者。“被”字句的作用是在被动句中引出施事者。但在汉语中动词的主动和被动没有形态的区别，所以，当具备两个条件时，“教”的语法意义就和“被”相同。

(1) “教”前面的名词不出现，或者根本说不清楚是什么使得乙发出某一动作。太田（1958）所举的例子都符合这个条件。“只教桃李占年芳。”一句，即使理解成使役句，也说不出是什么使得桃李占了年芳。表示禁止的使役句之所以容易转为被动句，也是因为这种使役句的主语往往是无法补出的。

(2) “被”后面的动词或动词词组可以表示被动，即必须是及物的，并且表示某一情况已经实现。试比较下面两个例子：（白居易の2例省略）

第一句中的“过好”不是动词，所以这句不能理解为被动句。第二句中的“报”是及物动词，后面带宾语，所以如果离开上下文这句理解为被动也可以。

至于“教”的宾语是不具有意志的东西，这未必是“教”由表示使役转为表示被动的必要条件。因为太田所举的例中“教”的宾语很多人。《现代汉语八百词》中也举了这样的例子：“桌子叫人搬走

れる理由に、さらに掘り下げた説明を加えうるとし「教」を例にとり次のように述べる。(以下概要)

「教」は使役動詞であり、語彙自体の意味は弱く、「甲」が「乙」に何らかの動作をさせるという語法意味をもつ。その動作に関して「乙」は動作主(施事者)である。「被」字の働きは受動文中から動作主(施事者)を引き出すことである。ところが中国語では動詞の能動と受動を形態上区別しない。そこで次の2つの条件を満たす時に「教」は「被」と語法上同等の意味を持つ。(1)「教」の前に名詞が現れない、あるいはそもそも何が「乙」にそうさせたのか明確に言わない。禁止をあらわす使役文が容易に受動文になるのはこの種の使役文の主語を往々として補うことができないためである。(2)「教」の後の動詞・動詞句が受動をあらわすには必ず他動詞であり、ある状況がすでに実現していなければならない。

不用更教诗过好。(白居易《赠杨秘书巨源》)

转教小玉报双成。(白居易《长恨歌》)

上記2例を比べると、「过好」は動詞ではないので受動文には理解できない。「报」は他動詞であり目的語を有しているので受動文にとらえうる。

目的語の無意志性は、必ずしも「教」が使役から受動へ転化する必要条件ではないだろう。確かに「叫雪滑倒了」については受動の用法のみ認められる。しかし、《現代汉语八百词》に「桌子叫人搬走了」という例があがっており、この例は両用の解釈が可能である。目的語が有意思性「人」であるにもかかわらず受動文にも理解しうるからである。

(P.231-232)

次に宋绍年2005⁶⁾の報告を通じて近年の研究成果を確認してみよう。同書では、〈第十二章 被

了。”这照样可以表示被动。只不过象“叫雪滑倒了”这种句子肯定只表示被动而不表示使役，而“桌子叫人搬走了”却有歧义，这倒是和“教”(叫)的宾语有无意志是有关系的。

〈第五节 近代汉语的被动〉二 其他被动式, P.231-232

6) 蒋绍愚 曹广顺 主编《近代汉语语法史研究综述》〈第十二章 被动句〉, 商务印书馆 2005

この中で紹介されている論文著書は以下の通りである。

江蓝生1999, 汉语使役与被动兼用探源, 《近代汉语探源》, 商务印书馆

蒋绍愚2002, “给”字句“教”字句表被动的来源, 《语言学论丛》第26辑

蒋绍愚2004, 受事主语句的发展与使役句到被动句的演变,

《意义和形式—古汉语语法论文集》, *Lincorn Studies in Asian Linguistic*.

橋本万太郎1987, 汉语被动式的历史·区域发展, 《中国语文》第1期

動句)において被動文の代表的文型として、一“被”字式、二“吃”字式、三“教”字式、四“与”字式、五“给”字式の5種に分類し、それぞれ節をたてて研究成果をまとめている。そして〈三“教”字式〉の節で“教”“著”“使”“让”はどれも使役の意味を持つ動詞であり⁷⁾、基本的文法機能は使役文型つまり使役の意味を持つ兼語文を構成することだと定義する。そのうえで、使役の意味を持つ動詞が被動の語法マークへ発展した軌跡と動因を明らかにするとして、やはり先ず上述の太田1958の解釈をとりあげて出発点としている。

同書では最初に厳格な語法学的な角度から切り込んだ成果として上述の蒋绍愚1994を紹介する。続いて江蓝生1999の中国語の使役動詞が被動を表すように転化する根本的理由を文法上の“施受同辞”(能動文と受動文は表層構造が文法上同じである)という特質にもとめ、転化の3条件として

- 1 (主語がある場合は) 主語は受事である
- 2 使役動詞の後の状況はすでに実現済みである
- 3 述語動詞は他動詞である

を呈示した点に言及する。が、蒋绍愚1994、江蓝生1999ともに太田辰夫の第三の条件(禁止義との共起)への再検討が必要であるとして“不要被/教他逃走了”の例文を呈示している。さらに“大熊猫病了, 大熊猫不教参观了”は完全に転化条件に一致するにもかかわらず依然として使役文(大熊猫病了, 管理员不教人参观了)であると判断されることから上述の条件が必要条件であるものの、十分条件ではないと不備を指摘している。

そして新段階へと向上させた研究成果として蒋绍愚2002を挙げる。蒋绍愚2002では使役から被動への転化は語法機能の拡張の結果であるとみなし機能拡張の要因に、

- 一 文頭の受事(受け手)は話題とも主語とも理解できる
- 二 “教”の後ろの動作主は有生命から無生命へと拡張される

の2点があるとする。この要因下で“教”の機能拡張の最終的完成をみるとし、典型的例文として“棹遣秃头奴子拔, 茶教纤手侍儿煎。”(白居易: 池上逐凉之二)ほか4例を挙げる。続いて蒋绍愚2002の内容を確認すると次の通りである: この例文は受事が文頭に表れているが、まだ被動文になっておらず、「茶(我)教纤手侍儿煎。」という意味である。つまり使役動詞の動作主が表れていないとはいえ、暗示されている。この“教”を“被”と理解しても文意は変わらないが、唐代では決してだれもそのようには理解しなかったであろう。総じて、使役文の文

7) p.397 この五分類はいささか問題がある。また“教”“让”の基本字義に使役の意味を認める点はいくつかでも現代語を基点とした捉え方であり、歴史的考察においては厳密な態度とは言えない。この問題に関しては後述する。

頭が受事であってもすぐに受動文に変わったわけではない。ただし、この種の文型は確実に受動文に近く、受動（受け手）が文頭に表れ施事（仕手）が表れないなら、つまりは使役文が被動文に転化する条件が新たに作り出されたといえる。文頭成分の受事は話題でも主語でもありうる。が、使役動詞“教”の動作主が明示されている、あるいは暗に示される場合は、文頭の受事成分は話題でしかなく、“教”の動作主が表れない、あるいは暗に示されない場合は、文頭の受事成分は話題でも主語でもあり典型的受動文に近いと思われる。唐代の“教”字文は多くがまだ“使役文—被動文”への転化の過程にあり往々にして使役と被動の両方の理解が可能である。さらに“教”字に後出する動作主もまた人或いは動物であり、動作主が無生物である例文は全唐詩中ほとんど見られず、晩唐になってようやく出現する。紅樓夢の例文“叫（教）雪滑倒了”（8回）は“教”字後出の動作主が〔+生命〕から〔-生命〕へと拡張したのであり、“教”字文機能拡張が最終的に完成したといえる。

上述の蔣紹愚2002は太田1958の第一条件に呼応しさらに深化させたと宋紹年は総評し、さらに次のようにのべる：前述の2つの方面（受事主語/主題；“教”字後出名詞〔±生物〕）には実際上使役文が被動文に転化する2つの段階、2ステップがある。第1段階は語法化の過程に属しており、語法化によってのみ使役と被動の2つの解釈が可能な文を見分ける、つまり、“教”字後出の動作主が〔+生命〕を維持するのであれば、“被”字文にはこのような制限はないことから、それは“被”字文との距離がまだ大きく離れていると確認できる。第2段階で作用するのは言語発展のもう一つの強力な動力、類推（Analogy）⁸⁾である。“教”字が已に部分的に被動の機能（使役、被動両方の意味）を獲得した以上、この種の使用が日増しに頻繁となるとそれらを“被”字文と同等にみなすようになり、それが使役文から転化したことや“教”字後出の名詞が人・生物である必然性は忘れ去られ、“被”字文に照らし類推することで“教”字後出名詞が人・生物に限られるという制限から脱却したと考えられる。

一般言語学の理論に照らすと、語法化は新たな語法形式や新たな品詞を作り出し、そのために系統だった整合性（使役文は歴史的語法化を経て使役受動両方の解釈が可能となる文形式をなす、というような）を改めてしまう；一方類推（analogy）は語法形式の細目を更新することができるだけで、新たな形式を作り出すことはできない。

8) 類推（Analogy）の言語学分野、とりわけ歴史言語学における定義機能については次を参照。2.7 diachronic linguistics, Analogy as structure and process Approaches in linguistics, cognitive psychology and philosophy of science, Esa Itkonen, University of Turku, [Human Cognitive Processing, 14] 2005. xiv, 249 pp.

蒋绍愚2002では、単純に類推だけでは新形式を創出できないが、類推と語法化が共起すると新形式を作り出すことができると指摘する。ここで中国語史上新種の語法形式といているのは、本来使役を表していた文形式を用いて被動を表すという新被動文である“教”字文を指し、これは、つまり語法化と類推による共同創作であり、中国語の被動を表す語法系統もこれによって改変されたとする。

さらに続けて、宋紹年は蒋紹愚2004を取り上げる。蒋紹愚2004では受事主語文の発展および使役から被動への演変を追求している。つまり使役から被動への発展には受事主語文の発展が条件になると指摘する。中国語には受事主語文は古来よりすでにあるが、使役文から被動文へ発展するには受事主語文がある段階まで発展する必要がある。受動主語文を a) 有標記の被動文、b) 意味上でのみ被動を示す文、つまり受動賓語が主語になっている文、あるいは“斬”“伤”“放逐”などの能格動詞(ergative verbs)が述語であり、受事が動詞の後ではなく前に現れる文、c) 「話題—題述」式の受事主語文、の3類にわけて、c類をさらに4種に分類し、その第4種「受事(+施事)+動詞句」の出現が使役文から被動文への新たな分析の条件となったとし、《敦煌變文集》の用例を多数引用する。そのうえで、“使”字文、“令”字文が被動のマークとならなかった理由を使役文としての使用期間が長く唐代の人々の頭の中で十分に固定されたものとなっていたためだと結論付けている。

宋紹年はさらにジェリーノーマン(罗杰瑞)と橋本万太郎(1987)の中国語の使役動詞が被動のマークとなるのは中国語アルタイ語化の結果であるとする研究成果を紹介するが、本稿で取り上げる問題とは直接かかわらないので省略する。

以上、宋紹年2005の中から太田辰夫1958に関連する部分を取り出して近年の研究動向を概観したが、宋紹年2005以後の成果についても簡単に紹介しておこう。

蒋紹愚2005は蒋紹愚1994の増修訂本ともいえ、事後10年間の学会の新研究成果を反映させつつ、著者自身の新たな成果と観点に基づいて補充更新したものである。前稿を大幅に改めたため書名も改めたと著者自身が〈前言〉で述べている⁹⁾。ここでは関連部分について改変増加された点を確認していく。

9) 原文は次の通り：《近代汉语研究概要》是在我的《近代汉语研究概况》的基础上撰写而成的。……在这部书稿中《近代汉语研究概况》的一些内容仍然保留或作了修改，但有不少内容是新增的，一方面补充了这十多年来其他学者的重要研究成果，一方面也更多了一点我自己的研究成果和观点。读者可以看到，和原书相比这部书稿改动的幅度是相当大的，有不少章节几乎是重写，所以书名也改为《近代汉语研究概要》。

同書では〈三“教(叫)”字句和“给”字句〉節冒頭で「关于表被动的“教(叫)”字句的形成, 太田辰夫(1958), 蒋绍愚(1944, 1997), 江蓝生(1999)都曾讲到。蒋绍愚(2002)把表被动的“给”和“教”放在一起讨论, 下面主要介绍这篇文章的论点。」(p.247)とことわっている。つまり、同書のこの箇所については宋绍年2005の報告を通じてすでに上述した蒋绍愚2002の内容を要約再掲したものである。重複を避けて先の不足分についてのみ補足する。

ポイントの一つに、蒋绍愚1994では“被”字被動文とその他に大きく分けて論じていたが、上に引用した通り“教(叫)”字文と“给”字文を同じ枠組みの中で論じた点に大きな進展がみられる。受動動詞の“给”の「授与—使役—受動」の語法化の軌跡が“教”字文の「使役—受動」の語法化の軌跡と完全に一致すると指摘する。さらに“被”字受動文と“给/教”字受動文の根本的差異を分析し、“他被提升为部长”は問題ない一方、“他给提升为部长。”が非文となる理由を“给/教”字受動文が使役用法から演変してきたためであるとする。また、“给/教”字文の多義解釈が可能な場合の一般的な傾向として、使役の主体が希望しない事項については被動文であり、希望する場合は使役文であることを Ryuichi Washio1993¹⁰⁾ の例文を引き英語との類似点を傍証に確認している¹¹⁾ のも興味深い。同書では受事主語文の発展と「使役—被動」の演変についても述べるが、この部分は蒋绍愚2004を引いており上述と一致するので、再掲しない。

また、蒋绍愚2009¹²⁾ でも他の動詞の豊富な用例を挙げながら、被動文に関してさらに考察が深められているが、本稿で問題とするテーマについては、蒋绍愚2005でほぼ結論を得ているのでここでは触れない。

さて、以上近年の研究状況について概観してきたのであるが、ほとんどが「使役—被動」に焦点をしばり論じており、本来の太田辰夫1958の「兼語動詞」についての検討は十分になされてきたとはいえない。次に「兼語動詞」に焦点を当てて、近年の動向を概観してみよう。

10) When Causative Mean Passive—A Cross Linguistic Perspective, Journal of East Asian Linguistics, Vol.2, No.1, Jan.

11) それぞれ1例ずつ引用する:

这件事要/别给他知道—使役

这件事要/别给他弄砸—被动

I shall have the gardener plant some trees. (causative)

John had his watch stolen by Mary. (causative construction, passive sense)

12) 蒋绍愚〈近代汉语的几种被动句〉《陕西师范大学学报(哲学社会科学版)》Vol.38 No.6

4 現代中国語語法における兼語式の定義と範疇

現代漢語語法において最初に「兼語式」という名称を使い始めたのは《現代漢語語法講話》¹³⁾とされる。その中で、“兼語式的特点是兩個主謂結構套在一起。……这种賓語兼主語叫做“兼語”。含有兼語的句法叫做兼語式。(兼語式の特徴は二つの主述構造が同じところにセットで表れることである。……この種の目的語兼主語を兼語という。兼語を含む文法を兼語式と呼ぶ。)”(p.112)と定義し““被”字句是一种特殊的兼語式(“教、讓、給”当“被”講也一样,……)”(p.119)と述べて受動文を兼語式の範疇に入れている。そこに挙げられている例文は、

一切帝国主义、軍閥、貪官汚吏、土豪劣紳,都將被他們葬入坟墓。(毛泽东)

であり、“就意义上說,全句的主語(“一切……土豪劣紳”)是兼語(“他們”)后头謂語(“葬入坟墓”)的受事。平常的兼語式没有这个特点。”と説明を加える。意味上、文の主語が兼語の後の述語の受け手となっている点において通常の兼語式とは異なるが、受動文も兼語式としているのである。

ところが、“句型范围的拓展,反映了人们对语言复杂性认识的不断深入。但另一反面,过于宽泛,不免会产生某些负效应。如“把”字句、“被”字句都曾被人认作兼语句,如果现在仍有人坚持这种看法,只能给整个语法体系带来不必要的混乱。(文型の範囲の開拓は、人々の言語の複雑さに対する絶え間ない深い認識を反映するのであるが、他方であまりに広範囲に及ぶとある種マイナスの効果を生み出すことは免れない。たとえば、“把”字文、“被”字文はいずれもかつては兼語文であると認識されていたが、もし現在も依然としてこの種の見方を固持する人がいるのであれば、語法体系全体に不要な混乱をもたらすだけである。)”¹⁴⁾という見解に代表されるように現代語法の範疇では一般的に受動文は兼語式から外されている。

受動文が兼語式から外されるのは、“他被邻居看见了。”や、“他被看见了。”という文中の「被」が動詞ではなく介詞として捉えざるを得ないからであるが、その根拠は“*他被了邻居看见了。”“*你被没被他批评?”“*他被邻居不看见。”がいずれも非文であるようにアスペクト助

13) 丁声樹編、中国語文叢書、商務印書館出版。初版1961年。ここで使用しているのは1979年第6版。簡体字繁体字混交は原文のまま。当該書は中国科学院語言研究所語法小組が1952年7月～1953年11月に《中国語文》に連載した原稿を修訂し1冊にまとめたものであるが、正式に「兼語式」と命名されたのは1953年である。

14) 崔贤賢《现代汉语语法学习与研究入门》,第十四讲“兼语式”的范畴, p.267,清华大学出版社 2004年

詞「了」を伴うことができない、「被没被」と重ね型を形成できない、あるいは否定文を包有できないという点にある。しかし一方で、“他很少批评。”“他很少被朋友批评。”の2文を比較し被字フレーズの有無が文全体の意味に影響する点（「批评」の動作主が変わる）から、「被」が介詞でも副詞でもあり得ないと主張する見解もある¹⁵⁾。

以上が現代語における兼語文の定義の変遷とバリエーションである。現代語の分類はあくまでも出現形態に対する詳細な分析に依拠しており、太田辰夫1958の主張は歴史的観点に立つ分類であるといえよう。その来歴と変遷を解明しようとすれば、当然太田辰夫1958の「兼語動詞」¹⁶⁾という枠組みが有効にはたらく。そうでなければ、“教”字文の多義文（使役／被動）における“教”の扱いに相当な困難をきたすことになるだろう。たとえば、使役用法では動詞として認め、被動用法では介詞として認める、というような処理法は何ら意味を持つとは考えられない。

5 授与動詞と兼語動詞

ところで太田辰夫1958では「給」に兼語動詞としての機能を認めながら¹⁷⁾も、「16.7 兼語動詞」では取り上げていない。しかしながら、「使役」と「授与」が互に隣接した概念であり、例えば英語における典型的な授与動詞 give が、cause to have と記述されるように使役動詞の用法をもつのははじめ、日本語においても「あげる」に使役用法を認められるなど授与動詞における使役動詞への転嫁が意味論的に説明されることを考慮すれば、中国語の授与動詞における兼語動詞へ転化は当然考慮されるべきである。

また一方で「中国語では広東語をはじめ多くの方言において、「与える」を意味する授与動詞が文法化を経て、英語の by にも似た受動文の動作者マーカー（以下「受動文 AM」と仮称）の機能を獲得している」とし、さらに「授与動詞がまず「事物の〈授与〉」から「行為の〈許与〉」への意味拡張を通して、許容使役文の〈被使役者〉マーカーとしての機能を獲得し、さらには、

15) 例文と説明は橋本万太郎1987による。

16) 張旺熹2006 では介詞派生のメカニズムについて「非終結動詞」の概念を示し、受動・使役動詞の非終結性特徴を分析、いずれも“N1 + V1 + N2 (V1の受けて、V2の為て) + V2”という文法枠を強制的に形成すると指摘する。「兼語動詞」という呼称が誤解を生みやすいのであれば、この「非終結動詞」あるいは他の呼称を導入することも考えられる。

17) 「給」については「第2部 17 介詞」で「我給你看看」の例文を挙げて「《給》が介詞のばあいは目的代替をあらわし、兼語動詞のときは使役あるいは受身の意味をおびる」(p.256)と簡単に述べるにとどめる。さらにすぐ後に《與》の項目をたてるが兼語動詞として認めていない。

許容使役文の〈被使役者〉が一面〈動作者〉でもあることに動機づけられて、受動文の〈動作者〉マーカーすなわち「受動文AM」へと拡張したものと見られている」という授与動詞の《授与》から《受動》への拡張はすでに現代中国語においても共通認識として捉えられているといえよう。この従来の研究を更に深化させた木村英樹2008については後述する。

さて、上述の2点を鑑みれば、太田辰夫1958で兼語動詞としてあげられる【使役】《叫》(交)《教》《使》《讓》、【被動】《被》《蒙》《教》(叫)《讓》のなかで授与の意味をもつ《教》(交)(叫)《讓》のみに使役と受動の機能が認めうる理由は明らかである。

あるいは逆の視点からみれば、兼語式における「使役／受動」の機能はその根源を授与動詞の文法化の流れの中でとらえうるという認知論的手法で理解することが可能になる。その場合同一資料中においてすでに両方の用例を見いだすことができる『賢愚経』に於ける“與”の存在が大きな意味を持つ。また『漢語大詞典』に「介詞。被。」と説明される項目に挙げられている下記の用例から、この“與”の受動機能が所謂譯經特有の用法でないことも確認しておきたい。

《戰國策・秦策五》：“〔夫差〕無禮於宋，遂與勾踐禽，死於干隧。”

王念孫《讀書雜誌・戰國策一》：“言為勾踐所禽也。”

《二刻拍案驚奇》卷九：“不要煩煩惱惱，與別人看破了，發出議論來。”

《紅樓夢》第六九回：“眾人雖素昔懼怕鳳姐，然想二姐兒實在溫和憐下，如今死去，誰不傷心落淚？只不敢與鳳姐看見。”

ここで、基本的事項について補足説明をしておく。本稿では《教》(交)(叫)《讓》を授与動詞と認めているが、その根拠を示しておく必要があるようだ¹⁸⁾。上述の「3 太田辰夫を出発点とする近年の研究状況」で宋紹年2005の分類に問題があることを指摘した¹⁹⁾が、《教》(交)(叫)《讓》を使役動詞とするのはあくまでも現代語法の中でのとらえかたであり、基本字義に使役の意味を認めることはできない。蔣紹愚2002の方法を借りて説明するならば、《教》(交)(叫)《讓》の使役用法は授与動詞の語法機能の拡張であると考えらるべきなのである。さらに、《教》(交)(叫)の表記の変遷には仮借についても考慮すべきである。使役用法として最も早期に出現する《教》についてその字義を確認すると、『説文解字』では「上所施下所效也」とあり、授

18) 2015年6月6日の口頭発表のあと会場で《教》(交)(叫)は授与動詞なのかという質問を受けた。

19) 脚注7)

与動詞の範疇に入れられるべき語彙である。

さらにもう一步踏み込んで説明するならば、太田辰夫1958で兼語動詞としてあげられる【使役】《叫》《交》《教》《使》《讓》、【被動】《被》《蒙》《教》《叫》《讓》について機能ではなく意味上の分類を試みるならば次のようになろう。

兼語動詞 【授与】《與》《給》《教》《交》《叫》《讓》

【使役】《使》《令》

【被動】《被》《蒙》

《使》《令》には使役用法しかなく、《被》《蒙》には被動用法しかないのに対して、本来授与の意味をもつ動詞群は使役・被動の両用法が可能である。ここで再考すべき問題として上述の蔣紹愚2004, 2005の見解を取り上げてみたい。同条件のもと《使》《令》はなぜ受動文に演変しなかったかという問題に対して、「这可能是因為“使”字句、“令”字句作為使役句的時間太長了，在語言使用者腦子中已經形成了一種十分固定的印象：它們就是表示使役的，不可能和被動句混淆。因為沒有歧義，所以不會引起重新分析。」（蔣紹愚2005, p.255）と説明するが、全体的に理路整然とした論調の中でこの部分は何とも歯切れが悪いと感じるのは論者だけであろうか。

この問題に対する解答は、上記の分類から一目瞭然に得られよう。同条件で受動文に変遷しない理由はそもそも《使》《令》は授与動詞ではないからである。さらに別の視点から説明を加えるならば、本来「令」「使」は書き言葉で記録されることを目的として使用され始めたことを忘れてはいけない。書面語にあつては曖昧性は極力避けられるべきであり、使役と被動とが同じ形式であるような現象は、太田辰夫1958の指摘を再度確認するならば、「現代語あるいは白話に特有であつて、古代語にはない」のである。論者はこれを「口語に特有であつて文語にはない」と読み替へたい。

次に、この現代語および口語に特有な授与動詞の使役／被動の用法について現代語研究の状況を確認し、歴史的観点からひとつ問題提起をしたい。

6 現代語における授与動詞《授与》から《受動》への道筋

前掲の木村英樹2008²⁰⁾では、授与動詞の《授与》から《受動》への道筋に次の三つのパター

20) 同書では、動詞の形態変化のない中国語におけるヴォイスについて以下のように述べる：「主語と、動詞の表す動作との主格関係」に関わる文法的な事項であり、「話者の観点」という意味的な現象の反映であると捉えなおす……ヴォイスという現象を「動作者と主語の関係を中心に、名詞表現の意味役割と格表示の対応関係の変更が何らかのかたちで明示的かつ規則的に反映される現象」と定義しなおした上で、中国語におけるヴォイスの認定とその体系化を試み……る。(p.4)

ンの存在の可能性が指摘される。

香港越語タイプ：〈授与〉－〈許容使役〉－〈受動〉

北京語タイプ　：〈授与〉－〈受益〉－〈受動〉

上海語タイプ　：〈授与〉－〈不許容使役〉－〈受動〉

さらに、フランス語の faire を例にあげ、不定詞節を伴う場合に使役動詞として機能するこの構文が受動の意味を表すためには、必ず再帰代名詞 (se) を伴わなければならないことを指摘し、faire 使役構文が受動の意味を発達させた背景に、使役と受動を繋ぐ「再帰的事態」という認識の存在を想定する。ところが、「受動の意味が発生するための前段階としては決して不自然なことではない」(p.17) としながらも、〈使役〉－〈再帰的事態〉－〈受動〉の形は中国語の上記三パターンの何れとも異なると述べている。その上で、北京語タイプの「受益」という概念が「再帰的事態」に最も近いとしつつ、「他の二つのタイプにおいては、「受動」の発達はあくまでも「使役」を直接の拡張源としており、影響性の方向が逆転する契機がどこにあるのかは決して自明なことではない」(p.18) と結論づけている。

以上が現代語における分析であるが、太田辰夫1958で挙げられている前掲寒山詩の例はこの見解を歴史語法研究の視点から再考する格好の材料を提供しているといえる。

莫教人笑汝（寒山詩）（人に笑われてはならぬ）

主語省略と考えられるこのフレーズの「汝」はまさしく照応詞（再帰代名詞的用法）であり、伝達すべき意味は「人に笑われるな」という受動の意味である。照応詞を伴わない「誠堪與人笑」の解釈が使役・受動の兩用に可能であるのに対してより受動の意味でとらえられる事になる。これに関連して、類似例として太田1958で挙げられる次の2例も参照されたい。

（寶玉）被襲人將手推開（紅21）（寶玉は襲人に手をおしのけられた）

反教天下好漢們恥笑我不英雄（百回本水湖28）

（かえって天下の好漢たちにわしが英雄でないことを笑われる）

これらの例から、中国語においても歴史的変遷のうえでは〈使役〉－〈再帰的事態〉－〈受動〉の

形は確認でき、使役を直接の拡張源としないパターンの可能性が考えられることが明らかであるといえよう。現代語においてなぜこの再帰用法が確認されえないのかは現代語研究プロパー諸氏にその回答をお任せしたい。

むしろここで注目すべきは、現代語において授与動詞の使役・受動用法への拡張現象が確認されるという事実である。論者は玄1995で六朝期の口語語彙「與」の用法を分析し、あたかも現代語の「給」の用法であるかのような共通点を確認した。歴史語法を扱う論考には往々にして言語の「発展」という用語をみるが、そもそも言語上の発展とは何をいうのか疑問である。共時的調査分析の結果が時代を超えて異なる時点で同様の特徴を有するというを再度ここでも確認したことを強調したい。

7 まとめと新視点導入の提言

さて、「がんらい使役と被動との区別は客観的な事実そのものにあるのではなく、主観的な判断にもとづく」とする太田辰夫1958の見解を別の角度からどのように説明できるか、という点を出発点として近年の研究状況を概観しつつ得た結論は次の通りまとめられる。

- (1) 太田辰夫1958「兼語動詞」で取り上げられている使役・受動の2種の機能が認めうる《教》(交)(叫)《讓》は本来授与の意味を持つ。
- (2) 授与動詞の典型である「給」「與」には当然使役・受動の2種の兼語動詞の機能用法を認めうる。
- (3) 授与動詞の《授与》から《受動》への移行過程は、〈使役〉を介在させる場合が多数を占めるが、時に北京語タイプ：〈授与〉-〈受益〉-〈受動〉、あるいは〈使役〉-〈再帰的事態〉-〈受動〉のパターンを認めうる。

以上の3点を踏まえたうえで、これまでの研究で看過されてきた「與」の兼語動詞の機能が口語の用法であるという点を再度確認しておきたい。口語判定のマーカ―は語彙の多音節化や文白異同の線上でとらえられるのが常であるが、ここで新たにプロトタイプ遷移²¹⁾(prototype shift)の概念を口語史研究に導入することを提案したい。つまり、動詞としての実義(授与)から使役・受動用法の語法標識への遷移を一つの典型として口語をはかるマーカ―に据えるというこ

21) このタームは『認知言語学入門』(An Introduction to Cognitive Linguistics F. ウンゲラー / H. - J. シュミット著 池上嘉彦ほか訳)の訳語による

とである。ここで、語法化と如何に異なるのか、という点について説明が必要となろう。語法化は「給」「與」といった語彙個別の事象についてその実詞から虚詞へ、語彙義から文法義へと変化することを指すのであるが、今回プロトタイプ遷移で明確にしたい点は、動詞としての実義（授与）から使役・受動用法の語法標識への遷移という現象自体を口語の典型として認め、ある時期には「與」で実現され、ある時期には「給」で実現される、いわば語法化のメカニズムの1つの典型が異なる語彙上に遷移することを表すものである。

この考え方を敷衍応用していくためには、さらにいくつかのプロトタイプを設定する必要がある。口語史研究に有効に機能するどのような典型が考えられるか、今後の課題である。

【参考文献】

(中文)

- 崔应贤2004：《现代汉语语法学习与研究入门》，第十四讲“兼语式”的范畴，清华大学出版社
 丁声樹1979：《現代漢語語法講話》，中国語文叢書，商務印書館出版 初版1961年
 蒋绍愚1994：《近代汉语研究概况》〈第五节 近代汉语的被动〉，北京大学出版社
 蒋绍愚 曹广顺 2005：《近代汉语语法史研究综述》，商務印書館出版
 蒋绍愚2005：《近代汉语研究概要》〈第五节 近代汉语的被动〉，北京大学出版社
 蒋绍愚2009：〈近代汉语的几种被动句〉，《陕西师范大学学报（哲学社会科学版）》Vol.38 No.6
 桥本万太郎1987：汉语被动式的历史・区域发展，《近代汉语研究》（二）蒋绍愚・江蓝生编，商务印书馆
 1999，原载《中国语文》1987年第1期
 张旺熹2006：《汉语语法的认知结构研究》，北京大学出版社

(日文)

- 木村英樹2008：『ヴォイスの対照研究 東アジア諸語からの視点』生越直樹、鷲尾龍一共編、くろしお出版

本稿は2015年6月6日関西大学で開催された中国近世語学会・関西大学東西学術研究所研究例会において「太田辰夫『兼語動詞』と認知言語学」と題して行った研究発表の原稿に手を加えまとめたものである。